

II-30

局 所 進 化 論 ～ 河川の研究から生まれた ～

村瀬 次 男 ・ 村瀬 寿 男

1. まえがき

ガンの正体解明研究の主流は、ガンの統一像を分子、電子のレベルに求めている。しかし、ガンをつくるしくみは細胞相互作用およびその非線形性であるから、細胞集団（組織）レベルの追究こそ必要である。

分子レベルでガンの正体を解明しなければ、ガンの正体を解明したことにならないと言うのは、間違っており、患者不在、人間不在の研究である。

2. 局所進化論の構造

局所進化論を体系づけるために、特殊相対論を構造モデルとして使う。¹⁾

局所進化論	局所進化論による局所発ガン論
(一見矛盾する二大原理)	
齊一原理	細胞分裂による細胞の生と死
カタストロフ説 (落し穴)	細胞分化、発ガン
個体相互作用の非線形性 (モデル)	細胞相互作用の非線形性
ムラセ変換 ※	ムラセ変換 ※※
チョウのカタストロフ (最大の成果)	チョウのカタストロフ
生物の向上進化の説明 (不要の概念)	ガンの正体の解明
天変地異	発ガン物質

3. ガンの正体

発ガンは局所細胞組織の進化であり、第1図に示す $A \rightarrow C'$ (ガン相) の相転移である。これは細胞分化の相転移の逆である。しかし、 C でなく、 C' に入るのは、遺伝情報の変化と生体免疫とがあるからである。生体免疫のはたらきは不完全で、異物性の強い変異細胞は除去するが、異物性の弱い変異細胞は除去しない。

ガンの正体はガン相およびガン細胞である。ガン細胞は、ガン相に入って生き残った細胞である。細胞組織のエイジングのしくみは細胞相互作用およびその非線形性であるが、ガンをつくるしくみも同じものである。ガン相ではムラセ数 (μ) が大であり、エイジング曲線 (秩序時間遅延曲線) が急こう配であり、その急こう配上の x はプラスゼロである。この最後のことは不完全免疫のゆえであり、一度ガン相に入った細胞 (ガン細胞) はガン相から出られない。エイジング曲線も、急こう配から緩こう配に回復することはない。

ガン細胞は生体免疫の網をくぐり抜けた変異細胞である。したがって、いわゆるガン免疫はない。ガンの浸潤は緩、急二つのエイジング曲線の段差が原因である。この段差は Q のはたらきによって崩れ、崩れたあとにガン細胞が増殖してくる。

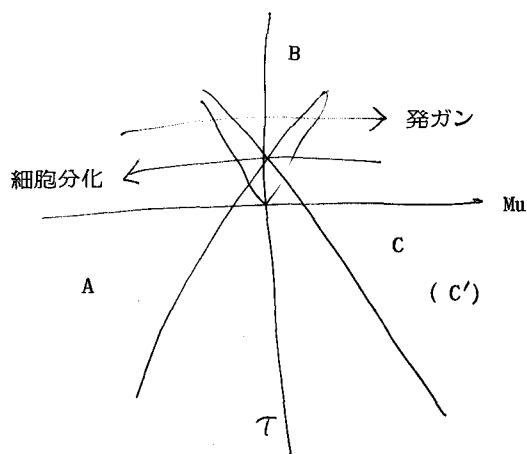
ガンの転移は、エイジング曲線が急こう配になっている場所に、遊走のガン細胞が取りついて増殖する現象である。

※ 河川システムから種のエイジング・システムへの変換のこと

※※ 河川システムから細胞組織のエイジング・システムへの変換のこと

文 献

/) 局所進化論の構造, 日本地質学会第91年会で発表の予定.



A, B, C, C': 細胞組織のエイジング相

A: 分化細胞相 (x はマイナス)

B: 分化相 (x はプラス, あるいは, マイナス)

C: 未分化細胞相 (x はプラス)

C': ガン相 (x はプラスゼロ)

Mu: 単位 Q 当りの流通エネルギー

と単位 Q 当りの非流通エネルギーとの比

T: 単位面積当りのエネルギー代謝速度

x : 局所細胞組織のエイジング速度

～秩序向上の向きをプラスと約束

Q: 食物-時間の流れ

～見掛けの流れである

第 / 図 局所細胞組織のエイジング・システムの数学モデル